特集

仮設住宅ぐらしを元気にする知恵

仮であれ楽しい我が家へ

photo : 宇宙大使☆スター　写真ケータリングプロジェクト「ハイ、ピーーース!」より

「仮設のトリセツ」とは

今回の震災に対応して、応急仮設住宅が五万二千戸建てられている。七月十五日の段階で三万五千戸の供給が完了していたという結果は大きな努力だといえるべきだ。今回の震災では、建設方法にもいろいろな手段が用いられ、以前の災害のときのような、ほぼ同一の「プレハブ」だけではない、木造やログハウスなど様々な仕様の応急仮設住宅が見受けられ話題にもなっている。

しかし、建設が終われば、それで一段落なのだろうか。

建設初期の四月に「仮設のトリセツ」http://kasetsukaizou.jimdo.com/ というウェブサイトがインターネットに公開された。

「トリセツ」とは「取扱説明書」の略であり、これは新潟大学の岩佐明彦（いわさあきひこ）准教授と研究室の学生が、二〇〇四年の中越地震（ちゅうえつじしん）の際に調査をした、応急仮設住宅の住まい方研究をもとにまとめられた、「仮設住宅を元気に生活する工夫」を実例として集めたものである。その岩佐准教授に仮設ぐらしの考え方を聞いた。

「私は新潟大学で建築を教えているのですが、中越地震のときに建てられた応急仮設住宅地を研究としていろいろ調べました。また現地の方々への支援として仮設住宅地に一日カフェを立ち上げ、いろいろとお話を伺うなどの活動をしていたのです。そこで見た中で**現地の方々が自分たちで仮設ぐらしを元気に工夫しているのを見た**のです。研究室で生活のお手伝いをしながらその事例を集めていきました。

この四月、学生が『自分たちも何かしたい』とそのときの事例を紹介することを提案してきました。研究を社会に還元することは大切だと考えてこの『仮設のトリセツ』というインターネットのサイトが始まったのです」

公開された「仮設のトリセツ」は、八月半ばでアクセス数二十三万件、このサイトからダウンロードされた印刷用データは七百件に上る。

いいのか悪いのか仮設の改修

紹介されている中越地震のときの改修事例はどのような経緯で実現しているのだろうか。

そもそも仮設住宅に勝手に手を入れていいのだろうか。

「中越の仮設避難に際して考えたのは仮設住宅はこの一回のために建てられたものなのであり、この後に入る人がいないのだから**いまを使いやすくしていいはず**だと。一方現場では、借りたものは『原状復旧』しなければならない『はず』ということで釘一本打てないと思っておられる人もいた。実際にはそれぞれに理屈があります。結論としては、災害救助法という法律上の規定で基本二年間の使用についての記述はあっても、原状復旧というのは条文にはありません」

応急仮設住宅は救助活動の一環として提供されるものであり言ってみれば医療品や食料と同じような位置づけである。したがって入居に際して一応の契約（誓約）などを交わすにしても、それは一般的な賃貸契約とは異なる。基本的にあくまでも運用する行政側との相談による。

「当時の行政の方にインタビューしてわかってきた問題は改修よりも、むしろ退去時に増えてしまった物の処理のルールが明快でなかった点です。生活の中で物が増えるのは仕方がないので、退去時の処分ルールがはっきりすれば行政側の許容ハードルは下がるという印象を持っています」

先に述べたようにいろいろな仕様のある仮設住宅だが、それぞれの与えられた性能の中で我慢して暮らすのではなく、むしろそれぞれの暮らし方と使いこなしによって自分が納得する生活を育ててほしいと考えると、最後の退去を前提としたルール内でカスタマイズ（改善）を許容するほうが建設的だろう。また居住者側でもそういった利用の相談を行政と行っていくためには、**個人で動くよりも自治的なコミュニティをつくり、そこで集められた意見を提案するとよりいろいろな可能性がひろがるのではないだろうか。居住者と行政との間に連絡や相談の場をつくり、顔の見えるコミュニケーションが行われることが望ましい。**

いつかは終わる「仮設住宅の生活」

その仮設住宅のくらしの先にあるのは何だろうか。

「仮設住宅は通常二年間ないし三年間という期間の利用ですが、通常の人生の中では起こらない環境の変化の時間です。阪神・淡路大震災や中越地震の事例と重ねて考えると、それが『失われた二年間』にならないこと、**この時間を如何に次の生活につなげていけるか**を考えることが重要だと思います。それは人のつながりのようなものだったり、新しい生活の場所を考えていくことかもしれない。後で振り返ったときに『この二年間があったから今の生活がある』と思えるようになるとよいと思います。実際に中越の方々の経験を聞くと、あれこれと大変だったことと同時になつかしく振り返ることができるお話もありました。仮設住宅地でお年寄りと子供たちが普段接することのない出会い方をしたり、近隣との『助け合う』関係ができたりなど。たとえば新潟県山古志（やまこし）村の人などは今まで集まって住むという体験のない地域だったのですが、実際に避難所や仮設住宅で集団生活をしてみて『集まって住むのも悪くないな』と復興後の住宅では『集住すること』を選択した人がいたりしました。そういった、この後の生活の選択肢が広がるようなことを支援したいと考えています」

いつかは「仮設住宅の生活」は終わる。そのときのために、今いる場所での時間をどのように重ねるのか。いろいろな心配、問題、障碍（しょうがい）がある現地だが、その**「終わりという始まり」に向けてできることから少しずつ始めてみること**が大事だといえるだろう。そしてそこからそれぞれが新しい生き方を見つけることができるような未来を期待したい。

連載・コラム

苦み

菊池 宏子

この異様な鮮やかさからは、到底味など想像できない。よれよれの橙色の外皮に包まれた、内臓のような色と艶の種皮が、生々しい生命力を発している。実に美しいこれは、少し前まで鮮やかな緑の苦瓜（ゴーヤ）だった。

この苦さを味わう事で、ビビビっと心と頭に刺激を与え、それが苦い気持ち・感情を呼び起こす。そんなに単純ではないけれど、「苦虫をかみつぶしたような表情」と言うように、味と感情はなんらか繋がっている。二言で表現するには複雑であり、それこそ特定の定義は無い。やりきれない悲しみ、後味の悪さ、忘れたくても忘れられない想い。こんなすっきりしない気持＝苦みのことを、かれこれ七年以上かなり真剣に考えている。

子どもに『苦い経験ってある?』と聞くと、ほとんど質問の意味すらわからない。『パパがアフガニスタンの戦場に行く度に、胸の下とお腹の辺りが痛くなるの』と囁く。これが今の所、最初で最後の六歳の女の子が表現した「苦み」だ。

また、地元の高級化で、昔からの住人がいられなくなったと嘆きながら、『良かった時代』の話をする老夫婦もいる。玄関先で見つけた木の切れ端で動物の顔を掘りながら、彼らだけの時空の話を永遠にする。そして、苦い＝辛い思い出話となり、話しがだんだんそれていく。

苦い感情は時間により培われる。何かのきっかけや嫌悪の感情がウイルスのように自己を蝕み、ウイルスが残した糞みたいな排泄物が苦みの要素になり、それが発酵して何らかの「かたち」として現れる。もしかすると、苦みはしわという彫り物や、おならとか口臭の様なものになるのかもしれない。

想像するとあまりいい絵ではないが、今、色々な所で、そんな苦い気持ちや感情を内に貯め込んでいる人々が多くいるように思う。私たちの目に写る街は、こうした気持ちをうまく発散できない場になっているのかもしれない。それをどう消化していくかで、人々が気持ちよく生活できる、きれいで住みやすい生活環境に近づけるのではないかと思う。

photo : Masato NAKAMURA

01
WA
WA
NEWSPAPER
わわ新聞

人と人との心をつなぐ
コミュニティ新聞
岩手県、宮城県、福島県にて、隔月発行。

1 特集 仮設住宅ぐらしを元気にする知恵
仮であれ楽しい我が家へ
4 「わわの輪」
各地で活躍する人々の輪
6 「わわのひと」インタビュー
復興のリーダーたちが語る
8 連載「仮設のイーハトーブ」
希望に向かうものがたり

東北では「私」のことを「わ」と発音する。
多くの「わ」が大きな「わ＝街」をつくりあげる事を願い「わわ」プロジェクトと名付けらました。

「わわ」のはじまり

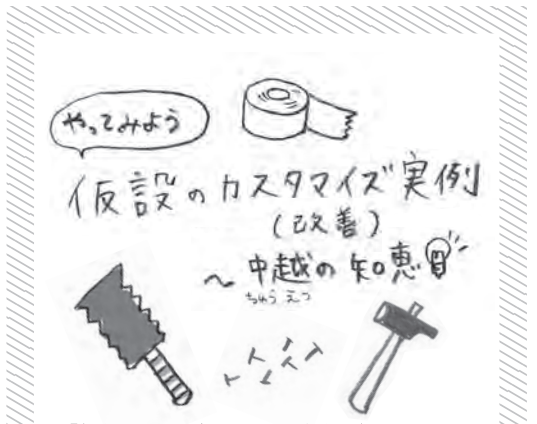
震災で変わった風景と変わらない風景がある。人間が創り出し自然に逆らうように存在しているものと、寄り添うように存在しているもの。変わらないことが正しいのか？変わることが正しいのか？今、私たちはその創造力と決断力を問われている。

岡倉天心（おかくらてんしん）は、北茨城市の五浦（いつうら）海岸に「波を見るためのあずまや」六角堂観潤亭（ろっかくどうかんじゅんてい）を一九〇五年に建てている。「潤」とは大波のことを指す。波に永遠性と絶え間ない変化を同時に認め、宇宙の本質と考えていた。わざわざ家族で引っ越し日本美術院の本拠を移すほど、この五浦海岸の風景に魅了されていた。極限まで海に近い断崖上に建てた六角堂の設計は、天心の本質に近づきたいという芸術的探求心の大胆さを感じる。しかし天心の創造力は、六角堂が津波に包まれ流されることを想定し設計していたのだろうか？結果、基礎だけの六角堂からは、すべてを想定しそれも自然の摂理であり、壊れたらまたつくり直せばよいとも読み解けるが、いくら天心でさえ想像を超えた波の強さを想定できなかったとも思える。六角堂をもう一度同じ設計で建設し直すのか？最新の技術で設計し直すのか？または、残った基礎だけを保存するのか？現代の岡倉天心はいかに再構築するだろうか？

私は戦後の焼け野原は経験していないが、今回の東日本大震災という未曾有の経験は、私たちに国家やその仕組みのあり方を問い正し、もう一つの価値や考え方に気づきを与えてくれた。「失うものが何もなくなり、つくることが生きること」となった今だからこそ、想像を絶する果てしない宇宙の渦の中で、今ここに「わたし」が存在していることの確かさをいかに感じ取るのかが大切だ。

「わわ」プロジェクトとは、そのためにも絶望をエネルギーに変え、創造力をもって表現・活動する人たちを支えるプラットフォームとして起動した。変わることも変わらないことも創造のプロセスとしてすべて受け止めることから始めたい。

中村政人
わわプロジェクト・プロジェクト・ディレクター



「仮設のトリセツ」より、中越で実際に行われていた事例から、お役立ち情報をお届けします。
これであなたもワンランク上の快適仮設生活に。

Illustration：岩山奇アヤノ

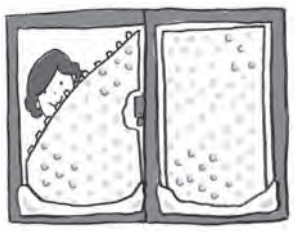
初級 まずはチャレンジ

表札は我が家の目印に

玄関は家の顔。金属製の仮設住宅なら、マグネット（磁石）で表札を作るとどこにでも貼れて便利。

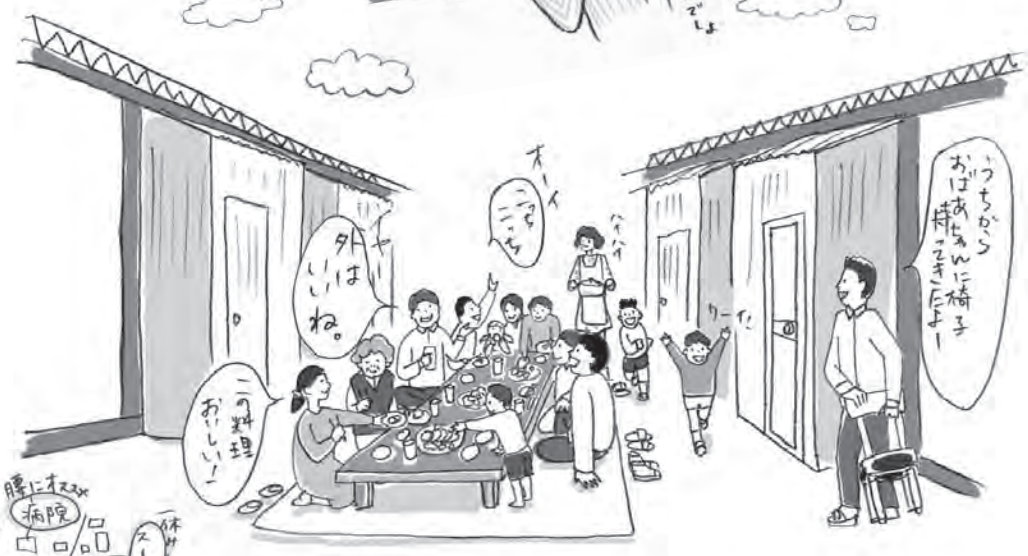
プチプチで結露カット

結露が発生しやすい仮設住宅。プチプチを貼れば、中も見えにくくなり、プライバシーの保護にもなります。



通路は仮設のリビング（＝座敷）

イスや机を持ち寄って通路に置くだけで、人が集まる交流の場が出来上がります。



中級 知恵を使って住みやすく。

ペットと一緒に仮設生活

犬を外に出しておくのはかわいそう。そんな時は犬小屋を作って。

通路は仮設の庭

植物を使って通路を彩る事で華やかになります。
水やりでお隣とのコミュニケーションも生まれるかも!?

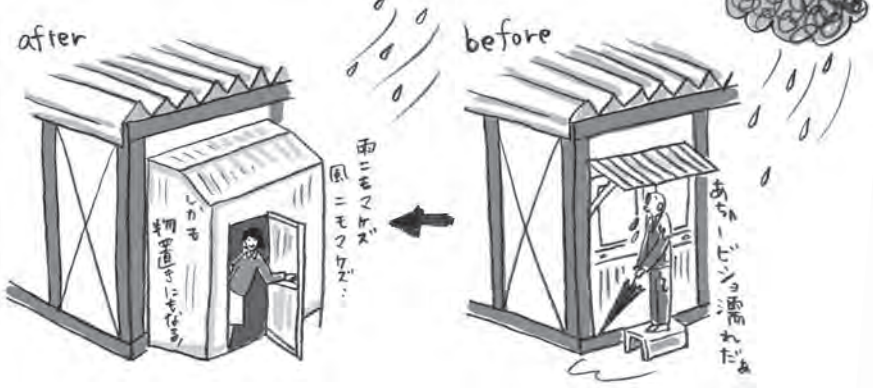
みんなで情報共有

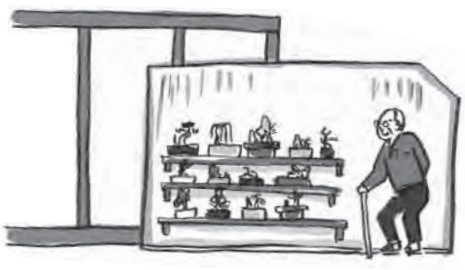
仮設住宅団地内も、周辺も。みんなで地図を作って共有すればぐっと身近に！

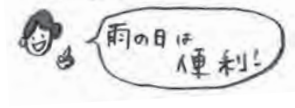
上級 我が家流！仮設の達人

玄関に見える「我が家流」

仮設で多く設置されている風除けパネルを元に風除室や物置を作るだけで一段と暮らしやすくなります。
こだわりの工夫で生活を楽しんで。







岩佐明彦
博士（工学）・一級建築士
1994年
東京大学工学部建築学科卒
2000年
東京大学大学院工学系研究科博士課程修了
2000年
新潟大学工学部助手
2003年
新潟大学工学部助教授
（准教授）

よく使う材料

■ ビニールひも
日当りのいい屋外にビニールひもをかければ簡易洗濯干し場に。ひもの所々に結び目を作ることで、ハンガーもずれにくくなります。また植物を結束するのにも使用できます。

■ すだれ、よしず
玄関や窓を覆うようにすだれを垂らすことで、夏の暑さ対策となると同時に、目隠しにもなります。よしずも同じように有効です。

■ 段ボール、プチプチ（エアーキャップ）
段ボールは防音効果が、プチプチは結露防止効果がそれぞれ期待できます。特に寒冷地では結露は深刻な問題となるので、対策しておくと良いでしょう。

■ プランター、ネット
植物を置くことで通路が憩いの空間に。また、ネットを使って朝顔などの植物を育てて壁面緑化することで、夏の暑さを和らげることが出来ます。

■ ビニールシート
空いている壁際にくくりつければ物置になり、玄関に垂らせば目隠しにもなります。

■ 木材・ポリカーボネート波板（なみいた）・雨樋（あまどい）・廃材
物置の制作や玄関の増築に使います。波板で壁を作れば風除室となります。雨樋を付ければ、出入りするときに濡れるのを防ぐことが出来ます。また、木材はもちろんですが、扉や戸は再利用できる可能性が高いので、改造する際は廃材がないか探してみましょう。

※改修にあたっては、専門的な知識や技術を要するものもあります。わからないときは管理する人や、自治体、専門家に相談しましょう。

新潟大学工学部建設学科岩佐研究室「仮設のトリセツ」より　URL http://kasetsukaizou.jimdo.com/

仮設住宅のいろいろ

岩手県住田町／パネル工法による木の9坪ハウス

岩手県釜石市／住戸の対向配置とバリアフリーデッキで住戸をつなぐ

宮城県塩竈市／斜面に並ぶ「規格建築」タイプ

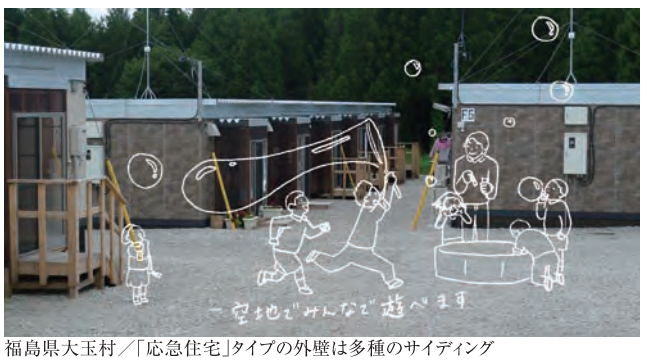
福島県南相馬市／ログハウス仮設住宅

岩手県大槌町／スタッコ塗壁仕上げ、木製サッシュの仮設住宅

岩手県田老町／張り線（トラバース）は揺れを止めるために設置されている

岩手県遠野市／大月研究室計画の木造仮設住宅

宮城県仙台市／着工から3週間で完成する「規格建築」タイプ



福島県大玉村／「応急住宅」タイプの外壁は多種のサイディング

岩手県遠野市／幅員4．5mの回廊が住戸をつなぐ

岩手県宮古市／「応急住宅」タイプは住宅用の部品を使用

福島県大玉村／風除室の外に後から付加された木製のポーチ

福島県三春町／福島県産材、地域工務店による木造仮設住宅

福島県大玉村／安達太良山を望む南斜面の仮設住宅地

福島県南相馬市／ウッドペイントされた集会場のある仮設住宅地
（プロデュース:五十嵐太郎、アーティスト:彦坂尚嘉、基本設計:東北大学五十嵐研究室
配置計画・設計管理:はりゅう ウッド スタジオ、日大浦部研究室）

特集／仮設住宅ぐらしを元気にする知恵

出口へ向かうデザイン

取材・新堀 学

この取材を行ったのは八月半ば過ぎ。早めに入居された場所では、いろいろな意見が出始めた時期である一方で、まだまだ入居した場所になじめず、コミュニティや人のつながりの形成にむけて一歩一歩積み重ねをしている場所もあるという時期だ。

それまでに福島、宮城、岩手の各地の仮設住宅地を四十か所近く視察させていただいた。いわゆるリースタイプ、住宅タイプ、鉄骨、木造、ログハウスなどさまざまなタイプのものがあり、また配置や立地などにそれぞれの工夫が行われたものを見ることができた。有名になったものとしては、岩手県の住田町の木造仮設住宅が筆頭に上がるが、最近のものでいえば岩手県遠野市に東京大学の大月研究室が計画したケアプログラムを考慮した木造の仮設住宅が、人間的なスケールやコミュニティ形成、周辺環境との関係づくりにおいて特に配慮をされていたことが印象深い。しかし、どれが良くてどれが悪いという建設時の優劣を問うことにはあまり意味がないだろう。大事なのは、そこでいかに生活が行われるかということだからだ。

新潟大学岩佐研究室とのご縁は、この「わわプロジェクト」と同時にスタートした「仮設住宅地リノベーションワーキンググループ」を通じてコンタクトを取らせていただいた。四月末のころである。ミーティングでは「いつかは終わる」ことを前提にした「仮設住宅」のありかたについて、建築の専門家のみならず、コミュニティデザイナー、アーティスト、脚本家、ウェブデザイナー、編集者などが集まり議論を重ねてきた。そういった活動のつながりが、「仮設のトリセツ」がバージョン2にバージョンアップするのと連携して「かせつの輪」www.kase2.net という広がりにつながりつつある。

一方で、東北の現地の各所で既にいろいろな建築家や計画者が、居住されている方々と一緒になって仮設ぐらしを改善する実演活動（ワークショップ）を始めているという情報も届くようになった。仙台のあすと長町で活動をしている東北工業大学の新井信幸（あらいのぶゆき）のエントランス改修「日曜大工支援の実践」や、東北芸術工科大学竹内研究室が企画参加した25（ニコ）25フレームを使った施設、東松島市内の仮設住宅で行われた前見文徳（まえみふみのり）＋基真由美（もとまゆみ）による日除け設置ワークショップなどがある。東北大学の五十嵐研究室と彦坂尚嘉（ひこさかなおよし）の「南相馬集会施設の壁画と塔」プロジェクトもそこに含まれるだろう。

そういった、いろいろな活動やアイディアが仮設住宅地同士の間に交換され、全体としての生活の質の向上につながることが望ましいと考えている。共通しているのは、単なる「器」のバージョンアップではなく、「ひと」や「コミュニティ」、そして「暮らし」のバージョンアップが大事だという点だ。

これからは「冬じたく」に向けて、ひとのつながりをもって備えることが期待される。

たとえば、寒くなる前に防寒対策、結露対策、防風対策と、簡単なコミュニティカフェの実演を一日ワークショップという形で実践することはどうだろうか。モデル的に開催した改善実演会を近隣の仮設住宅地からの参加者にも開放して、アイディアを持って帰ってもらうことも考えられるだろう。交流の中から現場発のアイディアが生まれてくるならば、それが自立的な復興まちづくりという出口につながる力になるだろう。

「冬来たりなば春遠からじ」を信じて、いまできること、望ましい出口のかたちを我々も共に目指して考えていきたい。

わわの輪 ver.01

各地域で活動する人々に焦点をあて、そこから生まれる新しい「つながり」の可能性に向けて。

「わわ」な情報、教えてください！

こんなこと、あんなこと、チョッとしたことでも、皆さんの各地域に根付いた面白い活動・試みをなさっている「グループ」「ひと」はいらっしゃいますか？それぞれの地域での、独自の活動の情報をお待ちしています。私たちは、皆さんと共に「わわの輪」を作り上げ、復興に役立てたいと考えます。現場の声、お待ちしています。お気軽にお寄せください。

※詳しくは8ページ。

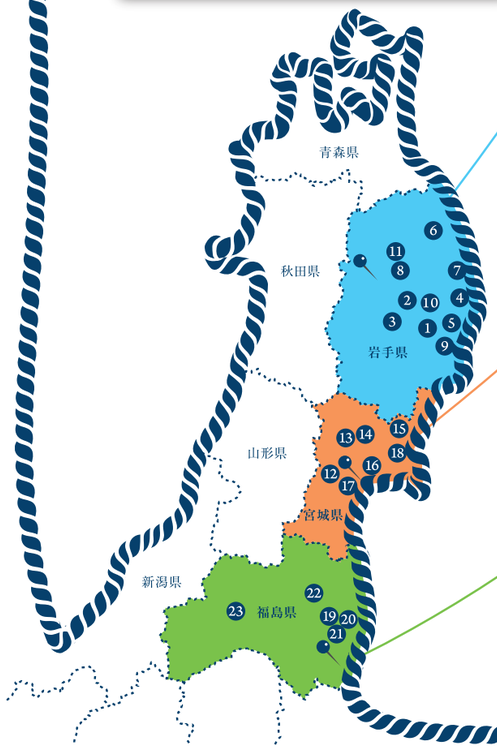
復興活動は無償利用可。都心のオープンなプロジェクトルーム。利用者を募集中です。

わわプロジェクト 東京プロジェクトルーム

代表：中村政人

東京・千代田区の旧錬成中学校を改修したアートセンター・アーツ千代田3331内に、わわプロジェクトのプロジェクトルームがオープンしました。このプロジェクトルームは復興支援活動の拠点の場として、ミーティング場所として、ワークショップ会場として、交流の場所として無償でご活用いただけます。詳しくは編集部までお問い合わせ下さい。

プロジェクトルーム開場時間12:00-19:00
火曜日定休
http://wawa.or.jp
080-4150-2550



灯篭づくりから笑顔が交わる場所を

1 まわり灯篭プロジェクト

連絡先：立田政弘

盛岡市鉈屋町でのまちづくり活動やワークショップ等を行ってきた商家サロンピッピを中心に、仮設集会場等でまわり灯篭キットの提供とワークショップを実施。新たな交流機会、もの作りを楽しむ機会を提供している。

盛岡市、大船渡市、住田町

http://sippi-morioka.com/

ゴミュニティ アート こころ

いわてのボランティア拠点

2 遠野まごころネット

代表：佐藤正市

遠野市民を中心に、ボランティア、社会福祉協議会、NGO、NPO、企業等が多様な連携で、自発性を活かした活動を行っている。被災地支援だけでなく、長期的視点で環境、文化、経済等多岐に渡る地域づくり活動を展開している。

岩手県沿岸部

http://tonomagokoro.net

食 環境 こころ アート

住民が主役の復興を支援

3 いわて連携復興センター

代表理事：鹿野順一

いわての中間支援NPOが集まり、被災地域の住民が主役の復興をテーマに地域復興に向け歩むことが出来る環境、被災前のようなつながりや賑わい、触れ合いを取り戻す事を目的に活動している。

岩手県沿岸部

http://www.ifc.jp/

photo：Takeshi HOSOKAWA

ゴミュニティ こころ 仕事

海と山が豊かな郷土に向けて

4 吉里吉里 復活の薪

詳しくは P6

代表：木村孝幸

吉里吉里地区被災者の有志が主体となり、新たな雇用の創出と経済復興に関わる、地域主体の取り組みとして、瓦礫の廃材を活用した"復活の薪"の生産と販売、さらに1000年先を見据えた林業講習会等を行っている。

大槌町 吉里吉里

http://kirikirikoku.main.jp/

ゴミュニティ 住 環境

photo：Takeshi HOSOKAWA

環境活動をベースにエネルギーも考える

6 森と風のがっこう

代表：吉成信夫

『環境』『こども』をキーワードに自然エネルギーの先端地葛巻を拠点に活動。被災地幼稚園での太陽光発電での上映会、太陽光発電の設置、エネルギーシフトの啓発運動、こどもの環境整備等、未来を見据えて行っている。

釜石市、野田村、葛巻町

http://wwwSd.biglobe.ne.jp/~morikaze/

ゴミュニティ 環境 こども

絵本を通して子どもたちの心を支える

8 絵本プロジェクトいわて

代表：末盛千枝子

被災地の子どもたちに本を届けようと盛岡で立ち上がった有志による市民団体。全国から集まった絵本を、幼稚園や小学校、イベント、絵本カー（移動図書）等で提供し、読み聞かせも行っている。

岩手県沿岸部

http://www.ehonproject.org/iwate/

ゴミュニティ こころ こども

三陸の漁業を支える新たなデザイン

10 AD BOAT Project（漁船購入プロジェクト）

菅原誠

被災した漁師たちの漁業再開への意欲とその様々な障壁を知り、また漁業による経済復興の為、プロジェクトを発足。F-1スポンサーの仕組みを応用し、何千万円もの漁船・漁具等の購入資金を広く募っている。

岩手県、宮城県、福島県沿岸部

http://www.sugawara-ltd.com/

ゴミュニティ 仕事 アート

photo：Takeshi HOSOKAWA

食を通して地域の人たちに笑顔を

5 さんさんの会

代表：山崎純

市内のレストランオーナーを中心とする民間ボランティアグループが、震災翌日の炊き出しからはじまり、現在まで毎日お弁当を作り避難所や仮設等の住民に直接届けている。ご用聞きやら身ケアの役割も担っている。

大船渡市

http://www.sansannokai.com/
http://blog.livedoor.jp/sansannokai/

ゴミュニティ 仕事 食

photo：Takeshi HOSOKAWA

祭りを通して町に元気を

7 山田祭をふたたび実行委員会

詳しくは P7

宮司：佐藤明徳

『山田祭』は、地域の心とアイデンティティを支える大事な行事だったが、今回の震災で神輿をはじめ、奉納される郷土芸能の衣装や用具等が流失。祭りを通した町の復興と、地元を離れた人が戻る事を願い活動している。

山田町

岩手県山田町八幡町7−1

ゴミュニティ こころ こども

photo：Takeshi HOSOKAWA

浜の女性たちの力が復興パワーの源

9 三陸に仕事を! プロジェクト

実行委員長：佐藤滋樹

"被災した浜の女性たちに仕事を!"と、漁網で編んだオリジナルの『ミサンガ』作りを釜石・大船渡で開始。イ賃が浜の女性たちに支払われる。現在、宮城も参画。

岩手県沿岸部

http://www.sanriku-shigoto-project.com/

ゴミュニティ 衣 仕事 アート

次世代を担う若者の力が結集

11 県立大学ボランティアセンター ～GINGA-NET～

実施主体：いわてGINGA-NETプロジェクト実行委員会

震災当初から活躍した岩手県立大学学生ボランティアセンター等が主催。全国から147校、1300名の学生ボランティアを2カ月間受け入れ、20ヶ所超の応急仮設住で学習支援やサロン活動等を熱い想いで実施している。

岩手県沿岸部、盛岡市

http://www.iwateginga.net/

ゴミュニティ

こころの再生を支援する

13 えぜるプロジェクト

代表：山田みちえ

塩釜市にある仮設住宅にお住まいの方々の仲間づくりを応援するボランティアグループ。お茶の会をしながら、入居者の皆さんのやりたいことを支援している。

塩竈市内の仮設住宅
（今宮地区、伊保石地区）

ゴミュニティ こころ

アートの力で町を元気に

15 石巻ワンダー横丁

詳しくは P6

梶原千恵

仮設住宅にアートで表札を提供。街中に拠点をつくり、県外からアーティストが訪れる。アートを通じてまちに活気を。

石巻市、女川町

chiSkj@yahoo.co.jp

ゴミュニティ アート

photo：Reiji OHE

小さな力を集める支援

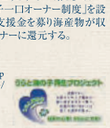
16 うらと海の子再生プロジェクト

社団法人うらと海の子再生プロジェクト／うらと海の子再生プロジェクト事務局

漁業者自らの足で歩んで行こうとする一環としてプロジェクトを発足。『うらと海の子―口オーナー制度』を設立。一口1万円で皆様から支援金を募り海産物が収穫できるようになり次第、オーナーに還元する。

塩竈市 浦戸諸島

shopmaster@urato-uminoko.jp
http://www.urato-uminoko.jp/



仕事

表現者が社会を変えていく

12 復興支援UG計画

MMIX LAB 代表：村上タカシ

長期化する避難所や仮設住宅エリアに表現者を派遣。参加型の表現創作活動を行うことにより、避難住民の心のケアを行ったり、受入地域の住民と避難住民と出会いや協同できるような環境づくりを図っている。

仙台、石巻、塩竈、鳴子

info@mmix.org
http://mmix.org/UG.htm

ゴミュニティ アート

photo：Izuru ECHIGOYA

仮設を元気にするアートの力

14 アーティストラン!! イポイシステーション!!

ビルド・フルーガス 代表者：高田彩

県内外アーティストが塩竈市内の仮設住宅内のコミュニティ支援を目的に塩竈・伊保石地区を拠点に、DIY講座、ものづくり交流会などを開催。

塩竈市 仮設住宅
今宮地区、伊保石地区

http://www.birdoflugas.com/

ゴミュニティ アート こども

photo：Reiji OHE

日曜大工で仮設住宅の生活を元気に

17 仮設カスタマイズお助け隊

東北工業大学工学部建築学科　新井信幸研究室
新井信幸／大林政夫

建築学科新井信幸研究室のメンバーが中心となり、軒先や収納等、仮設住宅の環境改善に努めているプロジェクト。日曜大工の手法で居住者の創意が環境を変えていく。

あすと長町 仮設住宅・仙台市

info@masaarch.com

ゴミュニティ 住

支援を通して人が出会う、つながる

18 繋プロジェクト

一般社団法人 東北産業復興プロジェクト・小田島友樹

避難者と支援者をダイレクトにマッチングする復興プロジェクト自立支援サイト『繋』を開設。どんな人が、どんな支援を求め、どのくらいの支援で実現可能かどうか、そして被災地が復興してゆくプロセスを伝える。

石巻市、女川町周辺

info@27p.jp
http://www.27p.jp/coutribute

ゴミュニティ 仕事

高田 彩さん

宮城エリア プロジェクトリーダー

宮城県

http://www.birdflugas.com/

1980年宮城県塩竈市出身。ビルド・フルーガス代表。2006年宮城県塩竈市にbirdo spaceをオープン。

石田 朋子さん

岩手エリア プロジェクトリーダー

岩手県

岩手県盛岡市生まれ。地域資源プロデューサーとして、『もりおかスタイル』をプロデュースするMoonbowの代表。

森 隆一郎さん

福島エリア プロジェクトリーダー

福島県

いわき芸術文化交流館アリオスのマーケティングマネージャー。並行してアサヒ・アート・フェスティバル実行委員、すみだ川アーツのれん会でも活動中。

映画からこころの復興へ

19 巡回映画上映会 いわきぼうけん映画祭実行委員会

代表：増田伸夫

2月に実施した「いわきぼうけん映画祭」のメンバーで活動。避難所や仮設住宅周辺のコミュニティ施設において、主に子ども向けの映画上映を行っている。年内に18回実施予定。

いわき市

iwakibouken@gmail.com
http://ibff.jp

ゴミュニティ こころ こども

photo：Jouji SUZUKI

つなぐ、むすぶ、ひろげる

20 地域活性プロジェクト［MUSUBU］

代表：宮本美美

人、地域、芸術、デザイン、情報などあらゆる分野を結び、クリエイティブな産業を生み出すプロジェクト。個々が主体となる地域活性を促進し、持続可能なまちづくりを目指す。「小名浜地区災害ボランティアセンター」に参加。

いわき市

info@musubu.me
http://www.musubu.me

ゴミュニティ 仕事 アート

photo：Jouji SUZUKI

支援ネットワークのポータル

21 日本ユニバーサルデザイン研究機構 いわき支部

代表：小針丈幸

日本ユニバーサルデザイン研究機構による孤立被災地への支援を目的としたチーム。NPOワンダーグラウンドが運営を行っている。主に、施設などへの支援物資の配布、コーディネートを担っている。

いわき市

info@wangura.net
http://www.wangura.net/nc/

衣 食 住

福島に絆を結ぶ

22 うつくしまNPOネットワーク

事務局長：鈴木和隆

県内のすべての応急仮設住宅生活者支援応援事業『絆づくり応援事業』を行う。避難者同士、市町村間の絆を深めるコーディネート、生活再建の支援を行う。

郡山市

http://www.utsukushima-npo.jp/

ゴミュニティ 住 高齢者

仕事のつながりから復興の思いへ

23 鈴木酒造店

詳しくは P7

鈴木大介

福島の事故によって、江戸時代から続く酒蔵を失う。地域の人々の思いを背に避難先で再び酒造りを始めた。

浪江町

http://www.iw-kotobuki.co.jp/
info@iw-kotobuki.co.jp

ゴミュニティ 食 こころ

photo：WaWa project

岩手県
大槌町
吉里吉里

NGO吉里吉里国 復活の薪
芳賀 正彦さん

P4 4

犠牲者に恥ずかしくないような生き方を
怖いものは何もない

プロジェクトのはじまりは、避難所での焚火

釜石市の北に位置する大槌町吉里吉里。あの日、ここも高さ約二〇メートルの大津波に襲われ、町のおよそ三分の二が瓦礫と化した。吉里吉里の住人・芳賀正彦さんは、地震直後に“とんでもない津波が来る”と直感し、家族とともに高台の避難所に避難したという。

「津波の日から役場とも一切連絡が取れませんでした。避難所に集まった人たちは、津波の翌日から動きはじめた。あるグループは残っている重機を操って道路を確保し、並行して行方不明者の捜索をしていました。他のグループは中学校の下にあったグラウンドの瓦礫を撤去して救助用のヘリポートをつくったり、灯油やガソリンを確保するためにガソリンスタンドの地下タンクから石油燃料をくみ上げていました。私たちでなんとかしなければ”みんながそう思い、大きな仕事ができたんです。私たちは当たり前のことをやりました。“まちづくり”というのは、こうした動きからはじまると思います」。芳賀さんは現在、瓦礫から薪をつくり、販売する『吉里吉里国復活の薪』プロジェクトを行っている。

『復活の薪』とは、長年住宅の建材として使用されてきたスギやアカマツを瓦礫の中から選び、手作業で釘や金具を取り除き、薪割りしたものを米袋に詰めたもの。“避難所での焚火”が、このプロジェクトの出発点だった。「私たちは避難所で瓦礫から薪を集めて焚火にしていました。震災から一ヵ月した頃、避難所にお風呂の施設が届けられました。そのお風呂が廃材を利用する薪ボイラーだったんです。自分たちで瓦礫の中に入って廃材をお風呂の薪にしていると、関西から来られたボランティアの方に“この薪、売ったらどうですか？”と言われたんです。瓦礫は薪にならなければ、ゴミと一緒になってしまう。泥がついていても、割ってみれば無垢の木と同じなんですよ。私たちがあの日、焚火に当たって癒されたように、“遠くの人の心にも火を灯せたら”と、販売をはじめました」

薪づくりのメンバーは、全員が避難所生活を経験した約十五名。『復活の薪』の売上はすべて作業に汗を流した人々に還元されるのだが、その方法も町を活性化させる仕掛けがある。

「売上は『吉里吉里銭ンコ』という名前の商品券になります。この町ではまだ三、四軒のお店しか再開していませんが、商品券を受け取った人はそれを使えるこの町で買い物をします。わずかなお金かもしれませんが、吉里吉里の町でお金がまわればいいなと考えています」

職場がなければ、俺がつくる

全国から注文が殺到している『復活の薪』だが、瓦礫の撤去は着実に進んでおり、廃材が手に入らなくなるのも時間の問題。そんな中、芳賀さんの頭にはもっと大きなプロジェクトが描かれていた。

「すでに私たちは吉里吉里に広がる手つかずの人工間伐林に入って、山の間伐整理をはじめています。間伐した木は、建築用材として売れるものを丸太市場に売り、細いものや曲がったものは『復活の薪第二弾』として一〇年、二〇年、ずっと続けていきます。その三年間、専業漁業を営む人たちの収入はありません。だから漁師にチェーンソーを握ってもらうんです。家もなくして、瓦礫の町になっても、俺はやっぱり吉里吉里に住みたい。職場がなかったら、俺がつくる」。間伐整理をして木材を売ると、年間五〇万円の収入が見込めると芳賀さんは話す。漁業が復活しても、海がしけたときや冬場を利用して行えば、副業として十分な収入が得られるのだ。「心と同時に、お金も大事なんです。今、『吉里吉里国林業大学校』という名前で一年かけて間伐整備ができるように後輩たちを仕込んでいこうと考えています。漁師たちにもぜひ入ってもらいたい。海で自由に船を操って、山に入ればチェーンソーも扱える。パソコン教室もやるつもりですから、漁師がパソコンを自在に扱うようになる。いいでしょう？ ここではみんなが『吉里吉里国林業大学校』の教授であり、学長であり、学生でもある。全部平等なんです」海があり、山があり、そこで働く人たちがいて、町になる。3・11に津波ですべてのものを失った吉里吉里の町では、四ヵ月が経った今、新しい“町”が生まれつつある。

「避難所で焚火を囲みながらみんなで話していたんです。津波で身内を亡くして、親戚を亡くして、尊い友人たちを亡くした……。犠牲者の姿も見た、顔も見た。犠牲者に恥ずかしくないような生き方をしていこうと、みんな心に決めています。被災者としていちばん大事なことは、俺たち被災者が自立するために“今何をやっているのか”“今日まで何をやってきたのか”“明日から何をやろうとしているのか”だと思います。そうした中から、“まちづくり”というものがあとからついてくる。挫折を味わったときは、山に入って間伐して、癒されて、また立ち直ればいい。何回も何回も挫折を味わいながら、都会の人に負けない、世界に負けないような人材をつくっていけばいいじゃないですか。この吉里吉里でね」

photo : Takeshi HOSOKAWA

NGO吉里吉里国 復活の薪

地域住民の働く場の確保が生活再建につながる。被災住民と災害ボランティアの手で津波によって倒壊した家屋の瓦礫が薪へと変わっていく。

【お問い合わせ】
岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里1-1-1
旧吉里吉里中学校　避難所
http://kirikirikoku.main.jp/
Email : kirikirikokumaki@yahoo.co.jp

宮城県
牡鹿郡
女川町

石巻ワンダー横丁
高校美術科講師 梶原 千恵さん

P4 15

震災を機に気づいた町・人・美術の魅力
この町を「アートの町」にしたい

“美術なんて役に立たない”と後悔した一ヵ月

宮城県北東部を代表する都市・石巻市と隣に位置する女川町は、宮城県の中でも被害が大きかったエリアと言われている。石巻駅から石ノ森萬画館をつなぐ『いしのまきマンガロード』にもなっていた立町商店街も、津波の被害を受けて一瞬にして姿を変えてしまった。震災から四ヵ月をすぎても、まだ再開している店舗は少なく、マスクをした人々が行き交う商店街の一画で、ひときわカラフルなシャッターが目にとまる。それが未来美術家・遠藤一郎さんを筆頭に若手アーティストたちが中心となり、街に活気を呼び戻すことを目指している『石巻ワンダー横丁プロジェクト』の拠点となっている場所だ。取材時にはここで、石巻西高校と石巻好文館高校の生徒たちが仮設住宅に入居する人たちのためにつくった表札がズラリと展示されていた。企画したのは女川町で生まれ育ち、石巻市の高校で美術講師をつとめる梶原千恵さん。今でこそ明るい笑顔を見せてくれた梶原さんだが、震災後しばらくは自分がこれまで“美術”に携わってきたことを後悔し、“何かしたい”と思いながらも、どうしても身体が動かなかった。

「地震の直後、電気や水道など衣食住に関係する仕事の人は、すぐに動いて役に立っていました。でも、私は美術の講師です。なんとか仕事には行っていましたが、美術とかアートとか、“なんて役に立たないんだろう……”と考えていました」。一ヵ月が経過する頃、“何かしたい”という気持ちは日増しに強くなっていく。そんな中、訪れたボランティアセンターでの会話が梶原さんの思考を変える。

「“何かお手伝いできることはありませんか？”と尋ねたら、“あなたは美術を教えることができるんだから、その力を活かして役に立ってください”と言われたんです。そこから必死で何ができるかを考えました。ちょうど仮設住宅の建設がはじまった頃で、現場を見に行ってみると、仮設住宅って全体的にグレーなんですよね。そこに人が住むことを想像したら、ちょっとでも明るくなるように何かつくりたいなと思ったんです」。木彫を得意とし、自宅の表札なども制作していたことから、梶原さんは廃材を使って仮設住宅に入居する人のための表札づくりをはじめる。すると、その姿を見ていた生徒たちから「私もやりたい」という声があがり、美術の授業で生徒と一緒に表札づくりを行うことになったのだ。当初は展示する予定ではなかったものの、『石巻ワンダー横町プロジェクト』と出会ったことがきっかけでここで展示されることになった。

再確認したアートの“力”。生まれ育った場所をアートの町に

現在では県外から何人ものアーティストたちがここを訪れるようになり、商店街の人たちとも交流が生まれている。しかし、シャッターに描かれた絵も、表札の展示も最初から地元住民にすんなりと受け入れられていたわけではない。その過程にはアートならではの“特権”があったと梶原さんは話す。

「美しいものや楽しいもの、明るいことをして活動していると最初はみんなイヤがるんですよ。“見ているだけでいい”という感じで。でも、じっと見ているとやっぱりやりたくなってくる（笑）。得体の知れないものだけど、なんだか“面白そう”と感じるんですね。現実に戻ったら楽しいことなんて全然なくて、暗いことしかないですから。それで“ちょっとやってみようかな”と参加してみると、例えば表札がひとつ完成したら、もっと楽しくなるんですよね。表札も、一週間で二四枚もつくった方がいらっしゃいましたから。彫刻刀を握るのも、絵筆を持つのも何十年ぶりというおばあちゃんたちが、そうやってどんどん元気になっていくのを見て、美術の力ってすごいなと思いました」。一時は美術の無力さに失望したものの、あらためてその力を再認識した梶原さん。そんな彼女は今、ある計画を胸に秘めている。

「昔から住んでいる人も、私を含めて若い人たちも、震災以前はこの町や商店街にそんなに興味がなかったんですよ。全然つながりもないし。でも、これからはもっと仲良くして愛着を持ってほしい。私も震災をきっかけにここが楽しい町で、面白い人たちがいっぱいいることを知ったんですよね。表札展示を見に来てくれた人も“次は何をするの？”と言ってくれて。だから、これからもっと面白いことを考えて、今ある絆を深く、広くしていきたいと思います。これはちょっと秘密なんですけど、私が住んでいる女川にギャラリーをつくりたいんですよね。最初は受け入れてもらえないかもしれないけど、これを機に“女川をアートの町にする”って勝手に思っています（笑）」

photo : Reiji OHE

石巻ワンダー横丁

石巻の駅前商店街を中心に、“みんなの要望にみんなで応えていく”活動を行う。その内容は、シャッターに絵を描いたり、仮設住宅のための表札をつくって展示して配ったり、鍋を囲んだり、新聞をつくったり……と実にさまざま。

お問い合わせ
Email : chi5kj@yahoo.co.jp

岩手県
山田町

関口神社・山田八幡宮・大杉神社・白山神社
宮司 佐藤（さとう） 明徳（あきなり）さん

一〇年かかっても 必ずもとの姿に戻す 祭りの復活が復興の証

P4 7

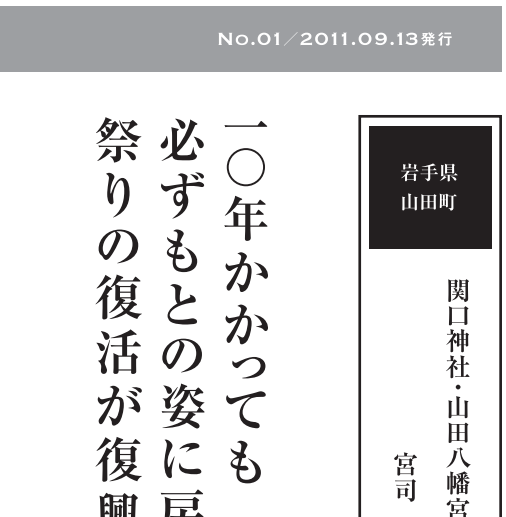


photo : Takeshi HOSOKAWA

町の人たちにとって特別な『山田祭り』

山田湾を一望できる高台にある山田八幡宮と、海から一五〇メートルほどの場所にあった大杉神社。このふたつの神社からなる『山田祭り』は町内最大のお祭り。祭りの初日は、山田八幡宮を出た神輿（みこし）が大杉神社に参詣をしたあと町内を練り歩き、東北を代表する郷土芸能『山田境田虎舞（やまだはちまんとらまい）』や『八幡鹿舞（はちまんしかまい）』が奉納される。翌日は、大杉神社を出たあばれ神輿が海を渡り、漁船が大漁旗を掲げて大漁を祈願する。故郷を離れた人々が、お盆ではなく『山田祭り』が開催される九月に帰省するということからも、山田町で生まれ・育った人にとってこの祭りがいかに特別であるかがうかがえる。

「とにかく子どものときから、体の中に“お祭り好き”のDNAが入っているんですよ。だから大人になっても、子どもみたいに（祭り）一ヶ月前になると血が騒ぐ。お盆をすぎると、あちこち聞こえる（練習のため）お囃子（はやし）がさらに加速されるんですよ」

しかし、3・11……。津波と火災により、山田町の八割は壊滅。大杉神社も鳥居ひとつを残し、神輿もろとも流されてしまった。

「地震が起きたあと、山田八幡宮、大杉神社の様子を見に行きました。鳥居などが倒れていないかを確認して、もうひとつ、町内のいちばん奥にある関口神社に到着した頃、津波が来ました。そして、その津波によって町内二ヵ所から火の手があがりました。瓦礫が散乱して水道も出なかったため、消火もできず、二日間ぐらいずっと燃えていたんです。高台にある山田八幡宮のふもとまで火の海でしたが、何もできませんでした……。二日後に自衛隊が空から消火活動をしてくれて、ようやく鎮火しました」

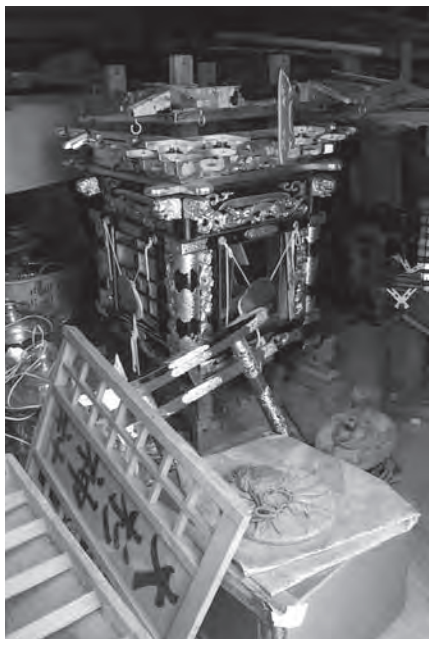
失ったものは神社や神輿だけではない。今年も『山田祭り』を楽しみにしていたであろう多くの町民の命も奪われた。しかし、佐藤さんは“まだこの先に失われていくもの”があるという。「避難所や仮設住宅にいる人たちのストレスもかなり溜まっています。先日、関口地区にある関口不動尊のお祭りをやりました。すると、子どもたちが最高に楽しそうでね。子どもが楽しい顔をしていれば、親もおじいちゃんやおばあちゃんも楽しくなるんですよ。その姿を見て神輿がなければ、ないなりの（祭りの）やり方があると思いました。さらに言えば、一年でも祭りを休むと郷土芸能が途絶える可能性があります。子どもたちに引き継いでいくべき郷土芸能が一年でも途絶えると、消滅する可能性も出てきます。祭りをやらない地方で郷土芸能がなくなっているのは、そういう原因もあると思います」

故郷を忘れてほしくない。山田に帰ってきてほしい

今年の秋には、例年とはかたちを変えた“もうひとつの”『山田祭り』が山田八幡宮で予定されている。その目的は、郷土芸能を絶やさないため、町の人々に楽しんでもらうため、そして一日もはやく山田町を復興させるためでもある。

「『山田祭り』を本来の姿でいつ行えるかは、予想もつきません。五～六年でできれば良いほうで、最長で十年ぐらいかかるかもしれません。たくさんの方が亡くなられていますので、当分は町内に神輿を出すのも少し考えものだと言われる……。とにかく町並がある程度できてこないと、難しいと考えています。でも、一日でもはやく祭りを復活させて、県外や内陸に避難した人に戻ってきてもらいたいんです」。町並が整い、大杉神社が再び造営され、神輿が治され、郷土芸能の道具ひとつひとつが揃い、またお盆をすぎるとお囃子が聴こえるようになる……。それが、お祭りの町・山田町にとっての“復興の証”だ。

『山田祭り』を受け継いでいくのは、もちろん山田町の人々。現在、町外へ避難している二〇〇〇～三〇〇〇人余りの町民に向け、佐藤さんはメッセージを贈る。「山田を離れて避難をされているみなさん。祭りがもとの姿に戻ったら、ぜひ山田のことを忘れないで戻ってきてください。こちらの地震が心配なくなって、住宅などを建てられる状態になりましたら、もとの通り山田に帰ってきて家を建ててください。故郷を忘れてほしくない。これが私の気持ちです」



山田八幡宮

山田八幡宮と大杉神社の『山田祭り』は地域のこころを支える大事な行事だったが大杉神社の神輿、半纏や太鼓等が震災で流され今年は見合わせとなる。祭りの復興に向け神輿制作や修理、楽器等の購入が必要とされている。

お問い合わせ／八幡宮社務所
岩手県山田町八幡町7－1

福島県
双葉郡
浪江町

鈴木酒造店 鈴木（すずき） 大介（だいすけ）さん

すべてを失い、バラバラになった町 酒をつくることで 「生きた証」を証明したい

P4 23

photo : wawa project

町から離れ、揺らぐアイデンティティ

東日本大震災後に発生した福島第一原発の事故により、四月二十二日から福島第一原発の半径二〇キロ圏内が避難区域に指定され、そこで暮らす人々は自分たちが生活していた場所に立ち入ることができなくなった。“日本一海に近い酒蔵”として江戸時代末期から続く鈴木酒造店は、福島第一原発から七キロ圏内の浪江町に酒蔵を構えていた。創業以来、「磐城壽（いわきことぶき）」は祝いの酒、暮らしの酒として地元の漁師たちを中心に愛されている。くしくも、三月十一日は酒造りにおいて仕込みの最終日。一年の苦労をねぎらう「甑倒し（こしきだおし）」の日を境に、あらゆる物事が一変してしまったのだ。

「津波が来たのは地震から四〇分後でした。私は消防団に入っているので避難誘導にまわりましたが、ぎりぎり逃げられる人、声をかけてもどうにもならない人をたくさん見てしまいました。風が海のほうへフッと吹いて振り向いたら、ちょうど一〇メートルぐらいの津波が来ている瞬間で……。私の酒蔵は本当に海の間際でしたから、そこで“蔵はなくなったな”と思いました。その後、私も消防ポンプ車を乗り捨て、まわりにいるみなさんに“車を降りて逃げろ！”と声をかけながら走って逃げました」

どうにか高台へ避難し、翌朝、捜索活動をはじめようとしたところで原発の事故が知らされた。「捜索に入ろうと消防団で集まった時点で一〇キロ圏外に退避ということになりました。私たちはどうしても地元の方たちを探したかったんですけど、それができずに離れるというのは本当に悔いが残って仕方がないです。その後、私は自分の住んでいたところにも戻れず、“自分が生きていた証”が消失した状態です。地元の方々も同じ思いで、“自分が何者であるか？”というアイデンティティそのものがすごく揺らいでいます」

つくることで“自分であること”を取り戻す

厳しく立ち入りが禁止されている避難区域。震災から二ヵ月が経過した五月、慰霊のため遺族らが一時的に町に戻ることが許され、数カ所の祭壇が設けられた。そこには奇跡的に残っていた鈴木酒造店の酒が上げられていたという。また、避難している住民からも「なんとか酒をつくってくれ、浪江町のものを残してくれ」という声をかけられ、鈴木さんは再び酒造りを行う決意を固めた。

「それまで私は勝手に自分の考えで酒をつくってきたので、酒は自分のものだと思い込んでいました。でも、地元の方が残っていた酒瓶を私たちの敷地などにまとめて置いてくださっていたり、いろんな応援をいただいて、つくってきた酒が本当にみんなのものだったんだなと強く思いました。地元の人たちもアイデンティティが揺らいでいますし、私の酒に関係を持ってくださったいろんな方がたくさん犠牲になっています。私は酒をつくることしかできないので、酒をつくることで亡くなった人たちの“生きた証”を証明したいと思っています。また、“酒をつくってこそ自分なんだ”ということも証明していきたいです」。一八三〇年から続く鈴木酒造店の歴史は、鈴木さんの意志と酒造りの要である酵母が残っていたことで再び動きはじめた。しかし、酒蔵も生活していた町も失った状態からのスタートは容易ではない。

「私たちの蔵があった場所には、二〇年ぐらいは帰れないと思います。地元の方々からは“お前がつくるなら、あの土地でつくらなくても磐城壽の酒になる”と心強い声をいただいていますので、今は放射能のことを気にせずに酒造りができる場所を探しています。ただ、課題としては資金面の他に、新しい場所で新しい人たちと環境を築かなければなりません。これは、地元の支援を失った人間としては大きなハードルですが“本当にいい酒をつくっていく”という強い気持ちで頑張っていきたいと思います」。環境も価値観もすべてが変化した今、鈴木さんの酒造りもまた、新しい意味を持ちはじめている。

「私は震災後一ヵ月、酒を口にしなかったんです。たまたま福島県内で同業者と酒を呑む機会があり、そのときに酒が持つ“前に進ませる素晴らしさ・力強さ”を感じたんですね。これからはその気持ちを届けながら、バラバラになっている地元の人たちをひとつにまとめていけるような酒造り、場作りをしたいと考えています」

photo : wawa project

株式会社 鈴木酒造店

江戸時代末期に酒蔵を構え、“日本一海に近い酒蔵”として、漁師たちとともに歩んできた。地震と大津波によって蔵元は流され、福島第一原発から約6キロ地点にある酒蔵への立ち入りが制限されている。再建へ向けて動き出し、現在は南会津町で酒造りを再開している。

お問い合わせ
http://www.iw-kotobuki.co.jp/
info@iw-kotobuki.co.jp

Editer&Writer : Nanae KONISHI

連載 仮設のイーハトーヴ

「どんぐりと山猫」

石神 夏希

その晩、ぱちぱちと塩のはぜるような音で一郎は目を覚ましました。布団を抜け出してみると、今度は角の向こうで「ひゅう、ぱちっ」と風を切るような音が聞こえます。一郎は足音を忍ばせてそっと覗きこみました。

がやがやがやがや。

十五夜をひかえた明るい晩でした。集会所のスロープのすぐ下が、水をこぼしたようにちらちらと光っています。それは赤いずぼんを履いたどんぐりたちで、その数ときたら三百でもきかないほどでした。

そしてどんぐりたちの前には、子どもだった一郎が見たときと同じように黒い長い繻子の服を着た山猫と、片眼の別当がいたのでした。山猫の眼がこちらに向かってキラリと光ったような気がして、一郎はドキッとしました。そのとき、別当がよくしなる長いむちで地面を打ちました。ぴゅう、ぱちっ。

気がつくと一郎の目の前に、つやつやしたどんぐりたちの背中だと分かったからです。そして一郎もまた、みんなと同じ赤いずぼんを履いた、小さなどんぐりになっていたのです。

山猫のまんまるな緑色の眼がこちらを見下ろして言いました。

「裁判ももう今日で三日目だぞ。いい加減、誰が一番えらいか決めたらどうだ」

やれやれ、どんぐりたちは相変わらずだ。まだ、誰が一番えらいかなんてもめているんだな。と一郎は思いました。でもなんだか様子が少しヘンです。そしてこのひとが一番とがっています」

「いいえ、ちがいます。丸いのがえらいんです。丸いといえば何と言ってもこのひとです」

「いやいや、やっぱり大きいひとが頼りになるよ。あのひとなんて私より二倍も大きいよ」

こんな調子なのです。山猫はしばらく考え込んでいましたが、ふいにぱちんと指を鳴らすと、どんぐりたちに向かって威厳たっぷりに言い渡しました。

「よろしい。しずかにしろ。申しわたしだ。このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めちゃくちゃで、てんでなっていなくて、あたまのつぶれたようなやつが、一番えらい」

一郎は思わずニヤリとしました。それは昔、一郎が山猫に教えてやった判決だったからです。ところが驚いたことに、どんぐりたちがいっせいに一郎を振り返ったのです。「うん。そこの、てんでなってないやつが一番えらい」山猫が一郎を指さすと、どんぐりたちがわあと歓声を上げて、一郎を担ぎ上げました。一郎は頭がくらくらして、気絶してしまいました。

それから、どうやってうちまで戻ったのでしょう。翌朝、一郎がポストを開けてみますと、中からぽとりと落ちたものがありました。それはつやつやと光る茶色いどんぐりでした。黄金でもなく大きくもないけれど、焦がしたような深い色です。一郎は山猫の「にゃあ」という顔を思い出して、苦笑いしました。てんでなってないけど、一番えらいか。

一郎は大きなあくびを一つすると、街へ向からバスに乗り遅れないよう急いで歩き出しました。

かしなハガキが、ある土曜日の夕方、一郎のうちのポストに届きました。

かねた一郎さま　九月十日

あなたは、ごきげんよろしいほで、けっこです。こんや、めんどなさいばんしますから、おいでんなさい。とびどぐもたないでください。

山ねこ　拝

おかしな、といっても一郎はこれと同じハガキを受け取ったことがありました。まだ小学生の頃です。どんぐりたちのおかしな裁判に巻き込まれ、山猫を助けたお礼に一升ますいっぱいの黄金のどんぐりをもらって帰ってきたのでした。

山猫のやつ、どうやってまたハガキを届けたんだろう。おれだってまだ自分の住所をそらで言えないのに、と一郎は思いました。まるでそっくりの玄関がいくつも並ぶ路地に帰ってくると、ときどき一郎自身でさえ迷子になったような気持ちになるのです。山猫が一郎のポストを見つけ出したのはほとんど奇跡に思えましたが、一郎はハガキを折り畳んで、くずかごに捨ててしまいました。壊れた家の片付けだってまだだし、仕事探しだって進んでいません。「今はそれどころじゃないんだ。」ひとりごとのはずの自分の声が、やけに大きく聞こえました。

連載「仮設のイーハトーヴ」

東北の精神を表現していた宮沢賢治の作品群を下敷きに、仮設住宅地で営まれるひとと風土が形作る暮らしを宮沢賢治作品の登場人物の姿を借りて描く。それは、賢治のように風土の忘れかけていた力を呼び起こすこころみであり、また「出口への二年間」をどう生きていくのかという希望に向けたものがたりでもある。

今回の原典は宮沢賢治の一九二四年出版の「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」より「どんぐりと山猫」から。

執筆：石神夏希（いしがみなつき）：脚本家
劇団「ペピン結構設計」を中心に、現代演劇の脚本家として活動中。また「COLUMBA」名義で神話・昔話・民話など古くから語り継がれる物語をモチーフにした現代劇を制作するほか、文筆活動も行っている。

挿絵：大野舞（おおのまい）：イラストレーター
旅する絵描き「デナリ」として書籍や雑誌、広告などの分野を中心に幅広く活動中。『日本の神様カード』（ヴィジョナリー・カンパニー刊）、絵本『星つむぎの歌』（響文社刊）、『ザグドガ森のおばけたち』（アリス館刊）など。二〇〇九年毎日新聞にて連載された『もしもし下北沢』（よしもとばなな著）で挿画を担当。

ボランティアセンターの紹介

■ 遠野まごころネット
住所：岩手県遠野市松崎町白岩字薬研淵1-3
電話：0198-62-1001

■ 野田村災害復興ボランティアセンター
住所：岩手県九戸郡野田村大字野田20-38-5 村役場横
電話：080-5949-8093

■ 宮古市生活復興支援センター
住所：岩手県宮古市小山田2-9-20
宮古市社会福祉協議会内
電話：0193-64-5050

■ 山田町災害ボランティアセンター
住所：岩手県上閉伊郡山田町船越9地割10-1
電話：0193-89-7515

■ 大槌町社協 復興支援ボランティアセンター
住所：岩手県上閉伊郡大槌町上町1-1
電話：0193-41-1555

■ 釜石市災害支援ボランティアセンター
住所：岩手県釜石市鈴子町15-2
シープラザ大型テント隣
電話：0193-22-2310

■ 大船渡社協災害ボランティアセンター
住所：岩手県大船渡市盛町字下舘下14-1
社会福祉協議会内
電話：090-7320-6504

■ 陸前高田市災害ボランティアセンター
住所：岩手県陸前高田市横田町字狩集96-3
電話：090-1344-6017

■ 盛岡市 かわいキャンプ
住所：岩手県宮古市川井1-60-3
電話：0193-76-2005

■ 気仙沼市社会福祉協議会ボランティアセンター
住所：宮城県気仙沼市東新城2-2-1
気仙沼市民健康管理センター
「すこやか」2階・駐車場
電話：0226-22-0722

■ 南三陸町災害ボランティアセンター
住所：宮城県本吉郡南三陸町志津川字沼田56
電話：0226-46-4088

■ 石巻市災害ボランティアセンター
住所：宮城県石巻市南境字新水戸1
（石巻専修大学5号館内）
電話：0225-23-6011

■ 東松島市生活復興支援センター
住所：宮城県東松島市矢本字大溜9-1
東松島市コミュニティパーク内
電話：0225-83-5001

■ 七ヶ浜町災害ボランティアセンター
住所：宮城県宮城郡七ヶ浜町吉田浜字野山5-9
生涯学習センター内 屋内
ゲートボール場スパーク
電話：090-6853-4490

■ 多賀城市社協復興支えあいセンター
住所：宮城県多賀城市中央2-1-1
社会福祉センター2階
電話：080-5949-7501

■ 復興支援"EGAO（笑顔）せんだい"サポートステーション
住所：宮城県仙台市青葉区五橋2-12-2
仙台市福祉プラザ4階
電話：022-266-6805

■ 岩沼復興支援センタースマイル
住所：宮城県岩沼市里の杜3-4-15
電話：0223-29-3711

■ 亘理ささえあいセンター「ほっと」
住所：宮城県亘理郡亘理町字旧館60-7
電話：0223-36-7559

■ 山元町災害ボランティアセンター
住所：宮城県亘理郡山元町浅生原字作田山32
電話：080-5949-7720

■ 相馬市生活復興ボランティアセンター
住所：福島県相馬市小泉字高池357
相馬市総合福祉センター「はまなす館」2階
電話：0244-36-7827

■ 南相馬市生活復興ボランティアセンター
住所：福島県南相馬市鹿島区西町2-117
鹿島区福祉サービスセンター内
電話：0244-46-1058

■ いわき市復興支援ボランティアセンター
住所：福島県いわき市平字菱川町1-3
電話：0246-38-6631

いわき市小名浜地区復興支援ボランティアセンター
住所：福島県いわき市小名浜寺廻町1-10
（旧永木家具店跡）
電話：0246-92-4298

何か困りごとなど相談があれば、
支援センターや社会福祉協議会へ

プロジェクトメンバー

中村政人（なかむらまさと）／プロジェクト・ディレクター
東京藝術大学絵画科准教授、アーツ千代田3331統括ディレクター。一九九八年よりアーティスト・イニシアティブ・コマンドNを主宰。

新堀学（しんぼりまなぶ）／プログラム・ディレクター
建築家。二〇〇三年にNPO地域再創生プログラムの設立に参加。リノベーションを介し、建築とまちづくりを行う。

菊池宏子（きくちひろこ）／コミュニティ・デザインディレクター
アーティスト・コミュニティ・デザイナー。米国・日本クリエーティブ・エコロジー社代表。地域連携による文化創造・想像／都市再生デザイナーとして活動中。

茁貴彦（あざみたかひこ）／プロジェクト・マネージャー
アーツ千代田3331スタッフ。二〇〇四年多摩美術大学情報デザイン学科卒業。主に動きを用いたインスタレーション作品を制作／発表している。

石田朋子（いしだともこ）／岩手エリア プロジェクトリーダー
岩手県盛岡市生まれ。地域資源プロデューサーとして、「もりおかスタイル」をプロデュースするMoonbowの代表。

高田彩（たかだあや）／宮城エリア プロジェクトリーダー
宮城県塩竈市出身。ビルド・フルーガス代表、二〇〇六年宮城県塩釜にbirdo spaceをオープン。

森隆一郎（もりりゅういちろう）／福島エリア プロジェクトリーダー
いわき芸術文化交流館アリオスのマーケティングマネージャー。並行してアサヒ・アート・フェスティバル実行委員、すみだ川アーツのれん会でも活動中。

編集後記

半年前、現地へ最初に出かけた時に「東日本大震災」とつにくくられる今回の被害の実相はそれぞれの地域の一つ一つのシリアスな出来事だということが実感されました。その「人」人に届けるためにネットとは別に「紙の新聞」を出すこと、地域をつなぐため三つの県にまたがる配布を現場で決めました。メッセージが人から人に手渡されるものであることを「わわ新聞」は大切にしようと考えています。

発行元／わわプロジェクト
一般社団法人非営利芸術活動団体コマンドN
発行人／中村政人
東京都千代田区外神田6-11-14 102号室
TEL／080-4150-2550（直通）
FAX／03-6240-1608
メール／info@wawa.or.jp
ウェブサイト／http://wawa.or.jp
編集／新堀学
編集・ライター／菊池宏子
アートディレクター／渡部浩明
デザイナー／早川沙織・廣澤祐子
イラスト／岩崎アヤノ
制作管理／茁貴彦
印刷／株式会社　北鹿新聞社
協力／経済産業省

【読者プレゼント】

塩竈の藻塩・フラワーソルト

宮城県塩竈市で古来からの塩づくりを行なう「顔晴れ塩竈」。貴重な結晶塩が詰まった「塩竈の藻塩・フラワーソルト」を三名様に。

茶匠 矢部園・仙人茶

宮城県塩竈市で八十年以上の歴史を持ち、七月三十一日に復興開店した「茶匠 矢部園」。日本茶のおいしさを堪能できる「仙人茶」を五名様に。

【応募方法】

oubo@wawa.or.jp

以下の項目をご記入いただき、メール（oubo@wawa.or.jp）にてご応募ください。（件名）わわ新聞 プレゼント応募係 （本文）①住所 ②氏名（ふりがな）③メールアドレス ④電話番号 ⑤希望するプレゼント番号 ⑥「わわ新聞 vol.1」をお読みになった感想 ⑦「わわ新聞」の入手先 ⑧「わわ新聞」に今後取りあげてほしいこと ※締切は 十月三十一日（月）とさせていただきます。また、プレゼントの当選は発送をもって代えさせていただきます。